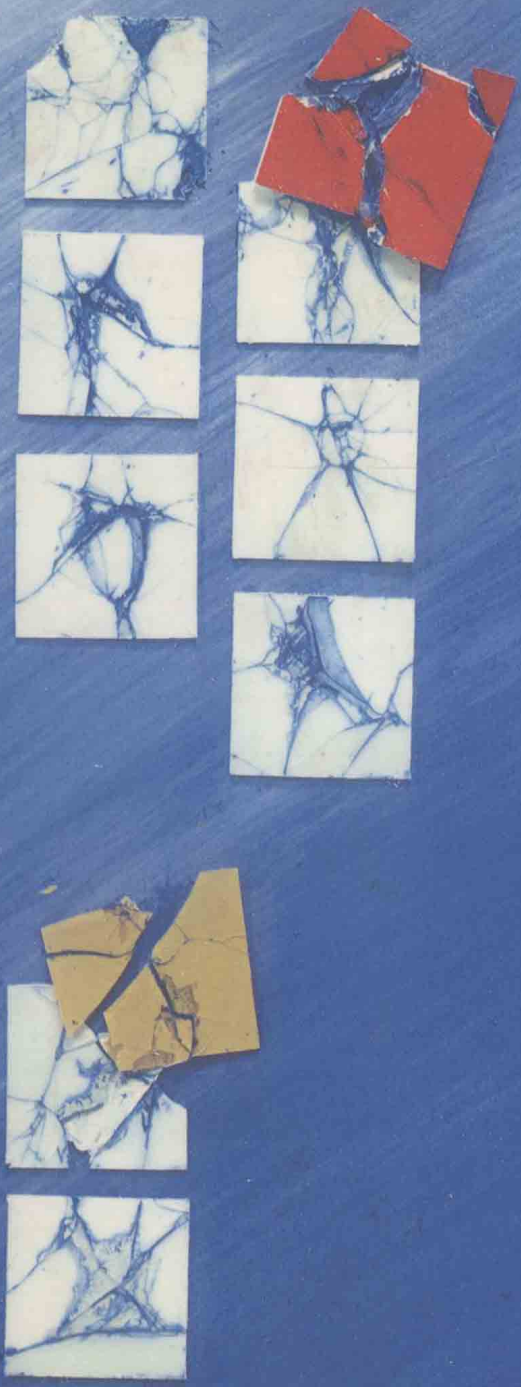
# 窓にのこった風



山川健一

# にのこった風

山川健一

中央公論社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

窓にのこった風

定価一二〇〇円

©一九八二

昭和五十七年六月一日初版印刷
昭和五十七年六月十日初版発行

著者　山川健一

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京二-三四
検印廃止

# 窓にのこった風

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 第一章

## 1

クロールで五〇メートルのプールを泳ぐ。水は高い天井からのライトで、明るいブルーに輝いている。

壁が近づく。さあ、ターンしよう。まだまだ泳げるんだ、と思う。失った体力と、意志の力と、ハピネスを回復するのだ。

もう一度ターンしようとした時に、コーチの陽子がタオルを振っているのが見えた。かまうも

んか、ターンするんだ。
もちろん速度は落ちていたし、筋肉は硬くなってしまってはいた。だが、まだ泳げるだろう。水が鉛のように重たく感じられるとはしても、沈んでしまうことはないだろう。
陽子は、プール・サイドをゆっくり歩いている。グリーンのタオルを振りながら、なにか叫んでいる。もういい加減によしなさいとか、明日の仕事に差しつかえるわよとか、なにかそんなことを言っているのだろう。彼女はぼくのことを心配してくれる。スイミング・クラブのコーチとして。そして、一人の若い女として。
このクラブに入会するためには、ずいぶん金がかかった。しかし、ぼくはその結果に満足している。五二キロしかなかった体重も、今では五六キロにまで増えていた。しかも、それは脂肪などではなく、水の中で鍛えられた筋肉なのだ。そう、ぼくは順調に体力を回復しつつある。
跳びこみ台が見える。しかし、そいつはなかなか近づかない。いくら水をかいても、手繰り寄せることができない。もう無理なのだろうか？　今夜、自分はいったいどれくらい泳いだのだろうか？
プール・サイドに重い軀を引き上げ、両手を膝について荒い呼吸を整えていると、陽子がやってきてタオルを掛けてくれた。
「あんまり無理しないほうがいいわ」

彼女は競泳用のぴったりしたスーツで、こりこりした軀を包んでいる。
「まだ大丈夫さ」
「まずフォームを直さなきゃね」
「わかってる」
タオルで軀を拭きながら、ぼくはロッカー・ルームのほうへ歩いて行った。
「今夜は？」
背中で、陽子の声がした。
ぼくは立ち止まり、彼女を振り返る。髪をタオルで拭き、それを彼女のほうへ投げた。
「真直ぐ帰るよ」
「奥さんのことが心配なんでしょ」
陽子は鼻の頭に小皺を寄せて笑う。
「そりゃそうさ」
そう答えると途端に、彼女は不機嫌になった。
一週間ほどクラブは休むよ、と言って、ぼくはロッカー・ルームへ引き上げる。
シャワーを浴びた。無数の水滴がぼくの肌を打つ。今は何時だろう、と思う。もう一時を過ぎているのだろうか。いずれにせよ今夜はよく頑張った。満足だ。

妻の芽衣子が失踪してから、きっかり一週間が経った。いや、実際にはもっと経っているのかもしれない。正確には、ぼくが彼女の不在に気がついてから一週間が経った、と言うべきだろう。

芽衣子は、少なくとも一週間に二度は、海辺のアトリエから電話をよこしていたのだが、その週は、ぼくの部屋の電話はことりとも音をたてなかった。だから最初は、電話が故障しているのかと思ったくらいだ。電話局へ問い合わせてみると、受話器をおいてそのままお待ち下さい、と表情のない、つまり声を聞いただけでは決してその顔を想像することができないような女の声が言った。

少しの間待つと、白いテーブルの上で電話のベルが鳴り、受話器をとると例の女の声が、

「あなたの電話は正常です」

「ありがとう」

「どういたしまして」

それで、電話の持ち主のほうはともかく、電話のほうは正常に機能しているのだということがわかった。

すぐに、アトリエのダイヤルを回してみた。二十回コールしたが、つながらなかった。

芽衣子となにか約束をして、それをこちらが忘れているために彼女が怒って電話に出ないので

はないか。たとえば土曜日の夕刻どこかのレストランで待ち合わせていたとか。そういうことなら十分にあり得ることだと、まずカレンダーをチェックし、次に手帳を繰ってみたが、心当りはない。

仕方ないから、いつもより多少広く見える部屋の中央の椅子に腰を下ろし、テーブルの上で手を組み、ガラス戸の向こうの高速道路を流れる、夥しいヘッドライトの川を眺めた。閉めきったガラス戸越しに、微かに車の排気音が聞こえてくる。そして、エアコンの低く唸るような音。

そうやって光の帯を見ていると、彼女がなにごとかを決意したのは確実のような気がしてくるのだ。個展をわずか二か月後にひかえているというのに、なんということだろう。

冷蔵庫を開けてみたが、ビールは入っていなかった。仕方なく、押し入れから買いおきの小壜をとり出し、グラスに注ぎ、その泡ばかりの生ぬるいビールを喉の奥に流しこんだ。

それが、一週間前のことだ。

今日は金曜日。週末を完全にあけるために仕事は全部終えた。担当の原稿は全て入稿してきた。泳いだ後はいつもそうだが、体重が十キロも増えたように軀が重い。しかし、それはむしろ心地良い疲れだった。徹夜して記事を書いたり、酒場で泥酔して帰った時の疲れとは別のものだった。

スイミング・クラブから帰ってすぐ、念のためにアトリエに電話し、芽衣子が出ないことを確

かめてからビールを飲んだ。疲れた軀に、弱いアルコールが少しずつ染みていくのがわかった。
一応、明朝の荷物を確認する。荷物といっても大したものはない。洗面具や替えの下着がバッグに入っているだけだ。
少しまとまった金も銀行から引き出しておいたし、車のガソリンも満タンにしてある。あとは、夜明け前に出発するだけだ。
ぼくは冷蔵庫からもう一本ビールをとり出し、落花生を籠にあける。冷えすぎたビールを少しずつ喉に流しこんでは、落花生の殻をわる。これで音楽でも聴けば、今自分が置かれている状態を忘れてしまいそうだった。しかし、芽衣子が電話に出ないのは事実だった。なにかがあったことにまちがいはない。
ふと思い立って、ぼくは同じマンションの真上に住んでいる友人、澁澤に一応電話しておくことにした。ぼくらは二年前に賃貸マンションを探し、上下の部屋を借りることにしたのである。ぼくが四〇一号室、彼が五〇一号室だ。
澁澤はすぐに電話に出た。
「今どこ、会社？　そうか、下にいるのか。ちょっと上がって来ないか、ワインをもらっちゃってさ。一人じゃ多いし、どうしようかと思ってたところなんだ」
「いや、今夜はやめておくよ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくは手短かに事情を説明し、日曜の夜には帰るつもりだから、と言った。
「遂に彼女はおまえに見切りをつけたんだよ。彼女をあんな田舎に追いやって、おまえはこっちで好き勝手なことしてたんだからな」
澁澤にアトリエの電話番号を伝え、ぼくは電話を切った。そして、芽衣子が一時アトリエに籠りきりになるのは、彼女のためにも、そしてぼくのためにも有効な方法だったのだ、と自分自身に言い聞かせた。

## 2

アトリエに着いたのは、土曜日の早朝だった。草と石ころばかりの荒地の中をゆるやかに曲がりながらつづく坂道を、セカンド・ギアのままかなりのスピードでのぼる。
いくつ目かのカーヴを抜ける時に、フロント・ガラスの隅を赤い屋根のアトリエがちらりとかすめた。小ぢんまりとしたその建物は雨戸をたてている。気がつくと、ぼくはかるい溜息をついている。そして、なぜだ、と心の中で妻に問うている。どうして自分がこんな仕打ちを受けなければならない、と腹を立てていた。
朝の透明な光を撥ねるアスファルトの路面は、丘を越えて内陸の小都市へつづいている。その

丘のほぼ頂点で、ぼくは車を海辺へ向かう小路へ入れた。減速が充分でなかったせいか、砂利道へ入った途端、車は大きく尻を振った。いくつもの小石が腹を打つ。

道は、今度は海へ向かってなだらかに下っている。アトリエは、林の陰に隠れて見えなかった。しかし、海は見えた。

芽衣子があれほど望んだ海は、目の前に、朝のまだ新鮮な太陽の光を浴びて、きらきらと輝いている。

芽衣子は、たとえば画集の中の、黄金色と明るい薄緑色で描かれたゴッホの麦畑を見ても、その向こうには海が見えるようだ、と言った。遙か彼方に横たわる地平線を見ても、ほんのかすかにではあるけれども、日没時の光を射返す銀色の波が見えるような気がする、と言ったりした。芽衣子は、奇妙に海の好きな女だった。

だから、海外へ出張することになった友人が、小ぢんまりした別荘を奥さんのアトリエに貸してやろうかと言ってくれた時に、そこから海は見えるのかい、とぼくは尋ねてみたのだった。

君は子供のようなことを言うね、と彼は言い、笑った。しかし、子供のようなのはぼくなのではなく、芽衣子のほうだった。そのことのために、ぼくらはもう何度も争い、互いに疲れ果て、結局のところ相手を放ったらかしにしたのである。それが一番良い方法だとは思わない。しかし、仕方なかったのだ。

アトリエの前の松林の中に車を停める。ガソリン・ゲージを見ると、赤い棒が半分程のところを指している。背筋に、疲れがたまっていた。エンジンを切り、車をおりる。静かだ。かすかに吹く風の音が聞こえるぐらいだった。それから、こめかみのあたりで、細く長く金属音が尾をひいているような気がする。無理もない。昨晩は一睡もせずに、そのまま夜明け前に出発したのだから。

鉄の黒い門は閉っていた。コンクリートの敷き石が、芝生の中を玄関へつづいている。

赤いトタン屋根のその建物は、静かに光を浴びていた。別荘とは言っても、友人が貯金をはたいて建てた、三部屋しかない簡素な建物だった。

玄関の扉を開くと、空気が澱んでいる。粘っこい空気が、軀にまとわりついてくる気がする。雨戸が閉っているので部屋の中は暗い。重い空気を切り拓く気もちでカーペットの上を歩き、テラスに接したガラス戸を開け、さらに雨戸も開け放った。涼しい風が吹きこみ、部屋の中に光が溢れる。

振り返ると、たしかにここで人が、芽衣子が生活していたのだということが直ちに感じられた。ガス台の上には薬罐が乗っていたし、テーブルの上には見覚えのある紅茶カップと、封を切った煙草、そして灰皿が置いてある。近づいて、吸い殻をひとつつまみ上げてみると、フィルターが口紅で汚れている。

しかし、どこを探しても、置き手紙のようなものはない——。

椅子に腰かけ、テーブルの上の煙草に手を伸ばす。ライターで火をつけながら、紅茶カップの中を覗きこむと、乾いたカップの底が茶色に汚れている。縁には、煙草の吸い殻と同じ、濃いピンクの口紅がついていた。

少なくとも、彼女はアトリエを出て行く前に、ここでこうして海の輝きを眺めながら煙草を喫い、一杯の紅茶を飲んだのだ。そうするだけのゆとりは、まだ心のどこかに残っていたらしい。芝生を敷きつめた庭の向こうには、草と石ころに被われた丘がつづき、丘の裾は雑木林にすべりこんでいる。そして砂浜と、海と、空だ。空は、もう秋の色を映している。

乾いた風が吹いて、軒下に吊したガラスの風鈴が鳴った。

風鈴は、最初に芽衣子をこの別荘につれて来た時、一人で半年もここに籠るのは淋しいからと言って、彼女が丘の下の商店街で買い求めたものだ。風鈴の音を聞けば、いくらか気もまぎれるから、と彼女が独り言のように言ったのを覚えている。しかし、ぼくは芽衣子を海辺のこのアトリエに閉じこめたつもりはない。それを望んだのはむしろ彼女自身のほうだった。

仕事のある日はあわてて起き出し、ろくに芽衣子と口もきかず、朝食もとらずに外に出て、深夜になっても帰らない。仕事のない日は別になにをするわけでもなく、だらだらとベッドで時間をつぶし、昼過ぎになってようやく起き出しては、パンをかじりながらテレビを見る。夜更けま

で、そんな具合にやりきれない時間をどうにかすごし、とにかく空が白む前に眠りにつこうと、再びベッドへもぐりこむ。

何が不足しているわけではない。何が不満なわけでもない。仕事はそれなりに順調だったし、妻の芽衣子はまだ若く美しかった。ぼくも芽衣子も健康だったし、互いを必要としてもいた。

けれども、家の外で出会うものも、家の中で出会うものも、索漠としているのだ。そんなふうに感ずる自分にも、そんなふうに感じながらつづける自分と芽衣子との生活にも、索漠としてしまう。だから、彼女はここへやってくることを望んだのだと思う。

そう、このぼくにしても、芽衣子の前で自分たちの生活に対するわだかまりを隠し通そうとすることに、疲れてしまっていた。だから、彼女が個展のための制作を理由にこのアトリエへ引っこむことは、彼女にとっても、そしてこのぼくにとっても好都合なはずだったのだ。互いにそのことを言葉に出して言うわけではないが、もう三年以上も暮らしを共にしてきた人間どうしの間には、暗黙の了解が成立しているものとばかり思っていたのである。

また、風鈴が鳴った。

アトリエに使われていた十畳ほどの洋間の扉を開ける。明かりをつけた時、ぼくはその場に釘づけにされ、一歩も中に入ることができなかった。

芽衣子の新しい制作は、もう完成していたのだった。

三方の壁には、それぞれ二つずつ窓が架けられている。まるでキャンバスを額縁に入れて展示するように、窓そのものが壁に架けてある。そして、それぞれの窓は二つずつ一組で、赤、青、黄色の絵具で塗り上げられていた。アルミの窓枠も、ガラスも、きれいに絵具が塗られている。

そして、どの窓も全て、ガラスがハンマーのようなもので叩き割られているのである。ベージュのカーペットの上には、赤、青、黄色のガラスの破片が散乱していた。

アトリエは、他のものはきれいにかたされ、小さなひとつのギャラリーのように見えた。芽衣子はこのギャラリーを誰かに、おそらくはこのぼくに、見せようとしたのだろう。

ぼくは戸口に立って、しばらくはぼんやりと六つの窓を眺めていた。ほとんどガラスの落ちてしまった窓もあるし、まだ半分ほど鋭利なガラスの破片が挟まっている窓枠もあった。ガラスの断面は透明な青みを見せており、それでようやく破け散った窓の中身がガラスであることがわかるのだ。窓枠には内鍵がついているが、それも赤か青か黄色の絵具で塗り上げられている。

ぼくはかるいめまいのようなものを感じ扉を閉めた。扉の向こうで、ガラスの破片がフロアーに落ちる硬い音がした。

とにかく、少し眠ろう、と思った。全てはそれからだ。まだ自分は、失われたものを回復しようとするのか、それともそれを完全に失うべく努力するのか、ということさえ考えられないでは



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com